



Partner Day 2019

イベント
レポート



菊地 哲

Satoshi
Kikuchi

伊藤忠テクノソリューションズ株式会社 代表取締役社長



「CUVICmc2 Partner Day」の背景とイベントの全体像をご紹介します。

基幹システムに特化したクラウドとして、CTCが2016年4月から提供している「CUVICmc2」。高いセキュリティとガバナンス、パフォーマンス保証を兼ね備えており、使用リソース量にもとづく完全従量課金制によって、オンプレミス環境に比べてコスト削減を実現することも可能です。また基幹システムに必要となる各種オプションサービスも、シンプルなメニュー構成によって提供。システム構築やオンプレミスからの移行も容易です。

CTCはこのCUVICmc2を複数のテクノロジーベンダー様と協力しながら開発・運用すると共に、数多くのSAPパートナー様を通じて提供。このようなパートナー様との協業関係を深めるために実施しているのが「CUVICmc2 Partner Day」です。今年は2019年6月25日に、東京・銀座の

GINZA SIXで開催。100名近くのパートナー様にご参加いただきました。

本イベントではまず、CTC 執行役員クラウド・セキュリティサービス本部長 兼 CTCファシリティーズ代表取締役社長の松田 欣也が挨拶。その後、昨年と同様に3つのセッションが行われました。

第1のセッションでは、伊藤忠商事株式会社 全社システム室 室長の浦上 善一郎 様が登壇。「次世代商人」を支える次世代基幹システム構築プロジェクト」と題し、CUVICmc2を活用した同社の基幹システム移行プロジェクトが紹介されました。

第2のセッションは昨年に引き続き、CTC アメリカでビジネス開発を担当する松本 渉が登壇。米国の最新クラウド動向に関して、注目すべき複数のトレンドが取り上げられました。

そして第3のセッションでは、CTC エンタープライズクラウドインテグレーション営業部長の小佐野 誠が、CUVICmc2ビジネスの最新状況について説明。さらに基幹システムに対する意識調査の結果などからパートナー様を取り巻く市場環境を概観した上で、新たなニーズに対応するCTCの施策が紹介されました。

これらのセッションの後、参加者の皆様は懇親会場へと移動。例年通りCTC 代表取締役社長の菊地 哲の乾杯でパーティが始まり、親睦が深められていきました。そして最後にCTC 常務執行役員の栗井 利行による挨拶で、会が締めくくられたのです。

このレポートでは、今回のPartner Dayで行われた3つのセッションの概要を振り返ると共に、ご参加いただいたテクノロジーベンダー様のコメントを紹介します。



開 会 挨拶



伊藤忠テクノソリューションズ株式会社
執行役員 クラウド・セキュリティサービス本部長
兼 CTCファシリティーズ株式会社
代表取締役社長

松田 欣也

皆様、日頃よりたいへんお世話になっております。本日はお忙しい中、この「CUVICmc2 Partner Day」にご参加いただき、ありがとうございます。

まずは自己紹介をさせていただきます。私は1984年にセンチュリ リサーチ センタ株式会社、現在のCTCに入社し、エンジニアとして配属されました。2000年にはインターネットのサービス部門を担当。2003年にはセキュリティビジネス、2005年以降はデータセンタービジネス、さらに自社のデータセンターを核としたクラウドビジネスを担当しました。2013年から5年間はCTCの100%小会社であるCTCファシリティーズに取締役として出向。2017年に金融事業グループ 金融第3事業部長となり、2019年4月にCTC 執行役員クラウド・セキュリティサービス本部長に着任、CTCファシリティーズの社長も兼務することになりました。

それではここでCUVICmc2の取り組みの歴史を、簡単に振り返ってみましょう。まず2015年にCTCはERPクラウド基盤市場に参入、CUVICmc2が誕生しました。2015年10月にはSAPジャパンとVirtustream、CTCの3社合同で会見を行っています。

2016年と2017年にはSAP Field Kick-Off Meeting (FKOM)のJapan Nightに協賛し、パートナー様との共催セミナーも開催。共催セミナーは2016年から2018年にかけて、合計25回行われました。

2017年にはパートナー様との共催セミナーに加え、ベンダー各社との共同プレスリリースも展開。その第一弾となったのが、2017年3月にリリースされた安川情報システム(現在の株式会社YE DIGITAL)様との共同プレスリリースでした。

そして2018年には、第1回となる「CUVICmc2 Partner Day」を開催。さらにパートナー様との共同デジタルマーケティングを行うと共に、「CTC Forum 2018」にもパートナー様にご登壇いただいております。

今回の「CUVICmc2 Partner Day」は昨年に引き続き2回目となりますが、今年も開催できたのは皆様の支えがあってこそです。本当に感謝しております。この会の目的は、CUVICmc2への理解と、皆様との交流をより深めていただくことにあります。本日は皆様と有意義な時間を過ごせればと思っております。

なおCTCでは、CUVICmc2の他にもTechnoCUVICを自営クラウドとして提供しており、ベンダークラウドとしてアマゾン ウェブ サービス(AWS)やOracle Cloudを展開しています。またセキュリティに関してもSOCを中心としたMSS(マネージドセキュリティサービス)を提供しており、マルチクラウド接続サービスとしてCTC Cloud Connectもご用意。さらにマルチクラウド運用として「CUVIC」Managed Multi-Cloud Platform(MMCP)も立ち上げています。

これらの各種サービスを通じて、皆様との協業の幅をさらに広げていければ幸いです。



[セッション1]

事例紹介

“次世代商人”を支える 次世代基幹システム 構築プロジェクト

伊藤忠商事株式会社
全社システム室 室長

浦上 善一郎 様



経営者から見た価値も意識しながら 次世代基幹システムへと移行

経産省が昨年度発行した「DXレポート」は、複雑化・ブラックボックス化した既存ITシステムがDX実現の足かせになると指摘しており、これを“2025年の崖”と呼んでいます。しかしこの状況を経営層が理解していない企業は少なくありません。また情報システム部門としても、現状では基幹システムが問題なく稼働しているため、経営者から見た価値を示しにくく、“2025年の崖”を乗り越えるための基幹システム刷新をどのように起案したらいいのかわからないという状況に陥りやすくなっています。

このような中、伊藤忠商事で実施されたのが「次世代商人”を支える次世代基幹システム構築プロジェクト」です。伊藤忠商事は創業からすでに160年の歴史を持ちますが、現在は数多くの技術革新や人々の価値観と生活環境の変化が起きており、“第二の創業”ともいえる局面を迎えています。“次世代商人”とは、新たな時代の潮流の中、私たちが目指すべき総合商社のあり方を表現したものです。

伊藤忠商事は1970年代からシステム化に取り組んでおり、その後数度にわたって大規模な基幹システム再構築を行ってきました。しかしシステムコンセプトは、1970年代から大きく変化していません。その結果、大きく4つの課題に直面していました。リアルタイムでの損益把握が困難なこと、新要件実装に時間とコストがかか

ること、システム仕様を理解している人材が高齢化していること、そして製品保守期限が目前に迫っていることです。

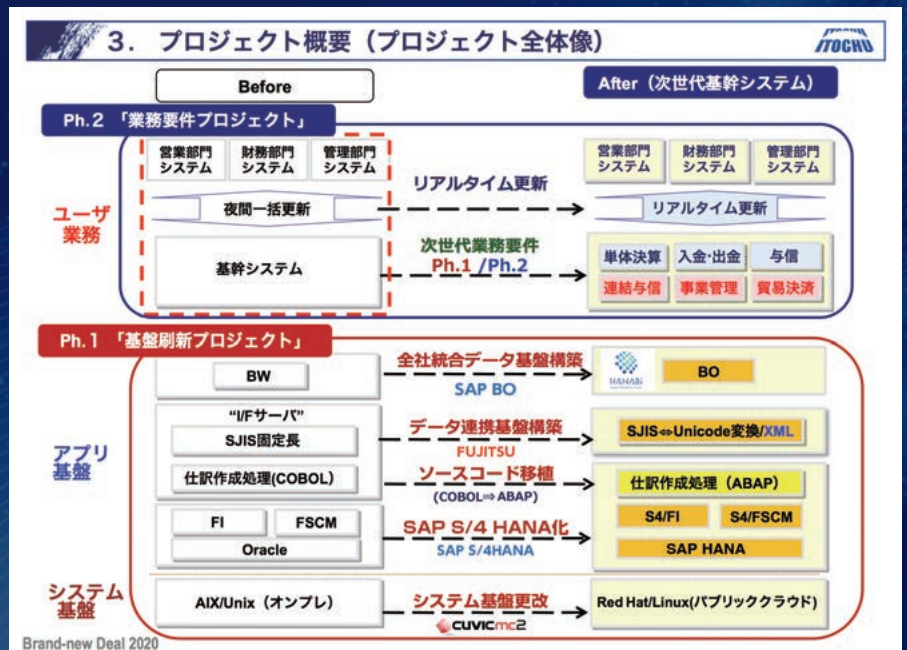
これらは次世代に向けての経営リスクとなります。そこでこのプロジェクトでは、現有資産を有効活用することを前提に、将来の長期利用に対応すべく、SAP S/4HANAをベースとした次世代基幹システムへの移行を行うこととしました。

その一方で、“経営者から見た価値”の向上も狙っています。伊藤忠商事の商売の基本である「か(稼ぐ)・け(削る)・ふ(防ぐ)」を徹底すると共に、働き方改革のさらなる推進や、連結経営のさらなる深化を見据えた機能の拡充も目指したのです。そのためプロジェクトの体制も、経営会議への

上程はIT企画部長だけではなく経理部長も担うこととし、プロジェクトリードもシステム単独ではなく、業務との両輪で推進することにしました。

8ステップで勧められた SAP S/4HANA化、 全社統合データ基盤も実現

プロジェクトの全体像は、大きく2つの部分で構成されています。フェーズ1は「基盤刷新プロジェクト」です。ここでは、ERPをSAP S/4HANA化すると共に、COBOLで記述されていた仕分け作成処理のABAP化、データ連携基盤の再構築、全社統合データ基盤の構築が行われてい



【図1】

ます。またシステム基盤も、オンプレミスのAIX/UNIXからCUVICmc2へと移行しています。フェーズ2は「業務用件プロジェクト」です。ここでは次世代業務要件を明確化した上でアプリケーションとして実装し、各部門システムとのリアルタイム連携を実現しています。

SAP S/4HANAへの移行は8ステップで進めていきました。不要オブジェクトを洗い出し移行対象を絞り込むためのアセスメント、アセスメント結果にもとづく改修と新規開発、DB変更に伴うパフォーマンステスト・チューニング、データクレンジング、ダウンタイム検証・確定、統合・品質強化テスト、移行リハーサル、そして本番切替です。本番切替に失敗すると次のチャンスまでに長期間待つ必要があるため、移行リハーサルを3回行うことで確実性を担保。本番切替は24時間体制のもと、9日間かけて実施しました。

この基盤刷新によって、リソース最適利用の実現、処理時間の高速化、全社データ収集基盤の構築、全社統合データ基盤構築を達成。経営者視点でも、重要システム基盤の長期安定化、連結経営のさらなる深化、「次世代商人」のためのデータ分析・活用促進が実現されています。

これらのうち次世代に向けて特に重要性が高いのが、全社統合データ基盤です。データを活用することでビジネスをより高く打ち上げたいという想いを込め、この基盤を「HANABI(花火)」と命名しました。また会社全体のデータ活用・分析リテラシーを底上げするために、IT企画部内にBICC (Business Intelligence Competency Center)も設置。これによって「必要なデータを、必要な時に、必要な形で抽出」を実現しています。すでにアルミビジネス損益月次分析のレポート作成時間を、5～6時間から5分に短縮するなど、大きな成果を上げています。

リソース最適利用では CUVICmc2が大きな貢献果たす

またリソース最適利用の実現では、CUVICmc2が重要な役割を担っています。今回のプロジェクトでは大きく3つのメリットが、CUVICmc2によってもたらされ

ています。

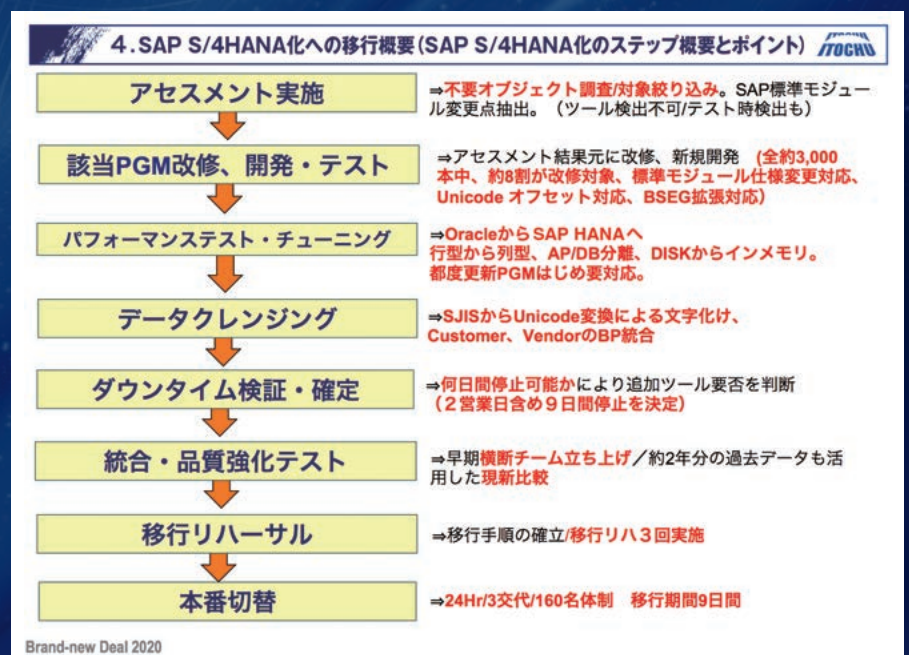
第1はインフラリソースの柔軟な払い出しが可能になったこと。プロジェクトの状況に応じたリソース活用をによって、スケジュール遵守が容易になりました。2019年3月までに払い出された仮想マシン数は、合計162VMに達しています。

第2はSAP S/4HANAの性能強化。CUVICmc2のストレージ性能は、PoCで使用した他社クラウドに比べて約2倍となっており、これによって夜間バッチ時間が2/3に短縮しています。

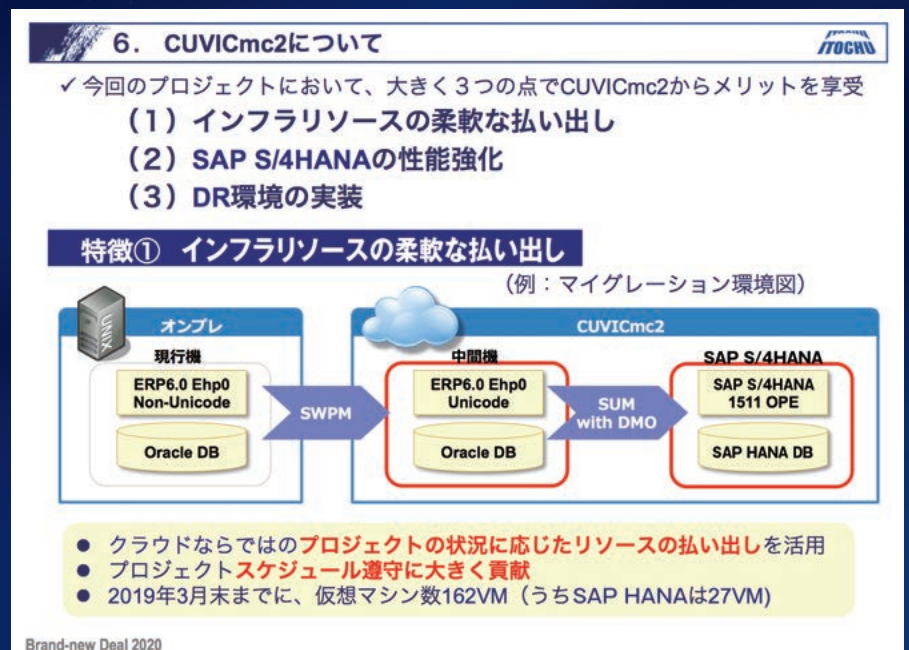
そして第3が、クラウド環境を利用したDRが可能になったことです。SAP

S/4HANAのソフトウェア機能ではなく、ストレージレプリケーション機能を活用したCUVICmc2のDRサービスを利用することで、周辺システムを含めた統一的なDR手法が実現できました。

今回のプロジェクトはマイグレーション方式を採用していますが、DX実現ではやはりデータ活用・分析が鍵になります。この観点でプロジェクト立ち上げを経営層に提案すると共に、CUVICmc2をうまく活用することで、ぜひ「2025年の崖」を乗り越えていただきたいと思います。



【図2】



【図3】



米国クラウド 最新動向

もう1つの事例が、米国のクレジットカー

その一方で、クラウド事業者も新たな手を売っています。SLAなしにすることで利用価格を80%安くする、といったプランが提示さ



れているのです。これはリソース利用率の低い時に安価に提供し、利用率が高くなった時には事前通知した上でインスタンスを停止するというもので、“Spot Instances”と呼ばれています。

とは言え、クラウド化は着実に進みつつあります。クラウド化の対象も、以前は主にノンミッションクリティカルアプリケーションでしたが、最近ではミッションクリティカルアプリケーションへと広がりがつつあります。2021年にはオンプレミス、オフプレミス、クラウドが1/3ずつになると予測されています。今後2～3年間の主流は、“現実解としてのハイブリッドIT”だと言えるでしょう。パブリッククラウド機能をオンプレミスで実装するためのプラットフォームも、クラウド事業者各社から提供されるようになっていきます。

“クラウドからエッジに”という動きも注目すべきトレンド

米国のクラウド化は大きな転換期を迎えつつあると言えますが、もう1つ注目すべき動きがあります。それは“クラウドからエッジに”という動きです。Amazon Web Services (AWS)、マイクロソフト、Googleといったクラウド事業者も、一昨年から昨年にかけて続々とエッジソリューションの提供を開始しています。

エッジコンピューティングとは、クラウドよりもユーザーに近い場所で処理を行うことを意味します。高負荷処理をエッジサーバーに分散することで、クラウドやネットワークの負荷を軽減できます。またクラウドに行く前にエッジで処理を行うことで、リアルタイム性が求められるアプリケーションも実現可能になります。5GやIoTの時代には、このようなコンピューティング環境が主流になっていくと考えられます。

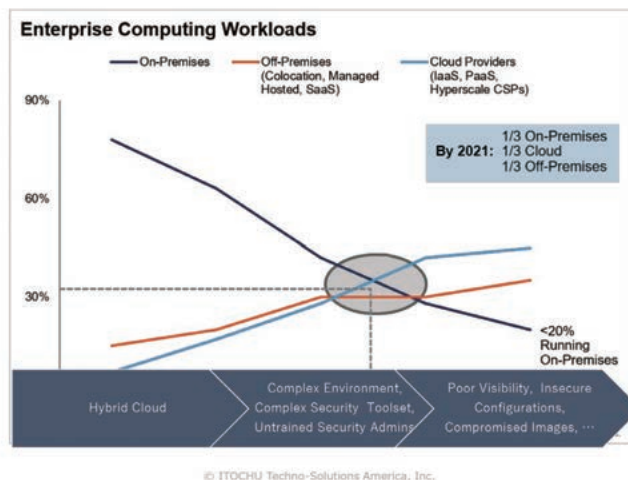
そのため高い成長率が見込まれています。2015年～2020年にかけてのクラウドの成長率が年率19%であるのに対し、エッジコンピューティングは2016年～2025年にかけて年率35.5%の成長を果たすと予想されているのです。その一方でエッジコンピューティングの成長が、クラウドの新たな

な成長を促すという指摘もあります。

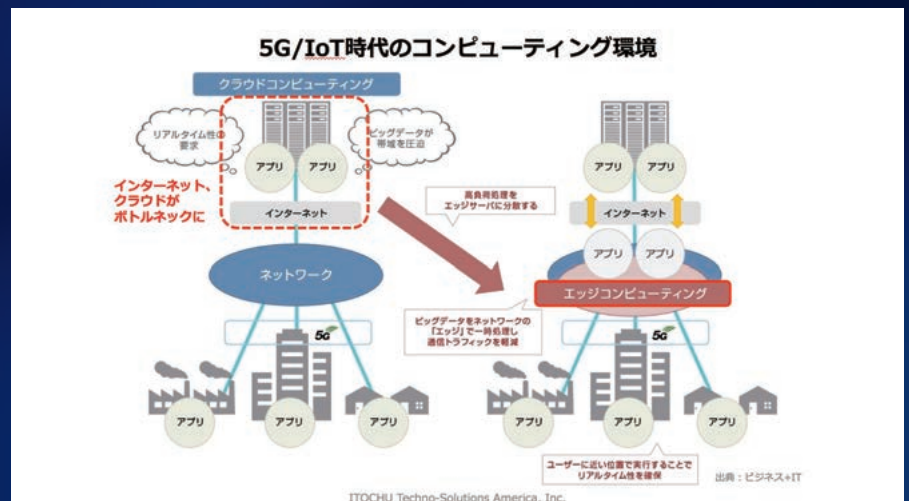
このように米国では、クラウドに関連する新たな動きが様々な形で進みつつあります。翻って日本の状況を見ると、米国との開きが目立っているという印象を受けます。日本企業はなぜもっとクラウドを使わないのかと、米国人に聞かれることも少なくありません。

もちろんその背景には、IT産業の構造が日米で大きく異なる、といったことがあり

ます。米国ではITエンジニアの7割はユーザー企業に在籍しており、自らのビジネスのDXを積極的に推進しています。逆に日本では、7割のエンジニアがベンダー側にいます。日米のギャップを埋めていくには、ベンダー側の積極的な支援が欠かせません。DXを加速できるソリューションやサービスを提供することが、日本のクラウド化推進の重要な鍵になると言えるでしょう。



【図2】



【図3】



[セッション3]

CUVICmc2 ビジネスアップデート

伊藤忠テクノソリューションズ株式会社
エンタープライズクラウドインテグレーション営業部
部長 小佐野 誠



この1年間で2倍に増大した CUVICmc2の受注件数

まずCUVICmc2のビジネス実績についてご報告いたします。2018年第1四半期に累計20社、24件だった受注が、2019年第1四半期には累計34社、48件となりました。この1年間で2倍の件数になったのです。このうち92%がSAPユーザーであり、販売チャネルも64%がSAPパートナー様です。CUVICmc2ビジネスを支えてくださっているSAPパートナーの皆様に、ここで厚く御礼申し上げます。

CUVICmc2ユーザーの72%は、SAP S/4HANAユーザーです。そのうち94%は新規でのSAP S/4HANA導入であり、残りの6%がERP6.0からの移行です。またCUVICmc2ユーザーの28%は、ERP6.0のままプラットフォームのみクラウドに移行しており、最近ではこのパターンの引き合いが急増中です。おそらく今後はクラウドへと移行したERP6.0から、SAP S/4HANAへと移行する案件が増えていくのではないかと予想しています。

それでは基幹システムに対する企業ユーザーの意識は、どのように変化しているのでしょうか。情報システム部門の役職者200名を対象とした調査結果を、簡単にご紹介します。

まず基幹システムの中で、どのシステムが重要なかという質問への回答ですが、これは業種によって大きく異なっています。例えば製造業では生産管理や在庫管理、購買・調達の重要性が高くなっていますが、

流通業では販売管理や物流管理、金融・社会インフラでは会計の重要度が高くなっています。

この大前提の上で、現行の基幹システムにおける業務上の課題を見ていきましょう。ここでは「運用コストが高額」が最もプライオリティが高く、「システム運用負荷が高い」「機械学習、RPAやIoTなど新しいテクノロジー・機能を活用できていない」がこれに続いています。従来型の課題に加え、新たな課題が顕在化していることがわかります。

外部サービス利用の拡大で複雑化した 環境運用に悩む企業が増大

それでは基幹システム再構築を行う上で、優先されている事項は何でしょうか。上位に挙げられているのは「運用導入コスト」「従来システムとの互換性」「セキュリティ」

「パフォーマンス」ですが、「自社業務に合わせたカスタマイズの可否」の多さも目立っています。カスタマイズを優先事項に挙げる日本企業は未だに多く、これがコストや運用の属人化につながっているのではないかと仮説を立てることができます。

システム利用形態としては、内製ニーズが依然として根強いものの、IaaS+外部運用や、SaaSの利用ニーズがそれを上回るという、逆転現象が起きています。またアプリケーションの開発状況についても、現在はスクラッチアプリケーション利用が多数を占めるものの、今後はパッケージやSaaSを積極的に利用していくという傾向が見られます。クラウド利用で重視する項目も、コストやセキュリティ、パフォーマンスに加え、導入や移行、運用サポートを重視する企業が増加しています。

これらの結果をまとめると、アプリケーションはスクラッチからパッケージ、SaaSへ

CUVICmc2実績

CTC

(2016年1Q~2018年1Q)

受注： 20社、24件

(2016年1Q~2019年1Q)

受注： 34社、48件



CUVICmc2ビジネスはSAPパートナー様との協業が中心

Copyright 2019 ITOCHU Techno-Solutions Corporation All rights reserved.

【図1】

と移行しつつあり、既存業務への新技術活用による業務革新が重要課題として意識されるようになってきていることがわかります。またシステムは、所有から外部サービス利用への流れが本格的に加速しています。

その一方で、外部サービスを積極的に活用する反面、複雑化したシステム環境をいかに運用するかに悩む企業も増加しているようです。CTCでもこのような相談が増えています。またSAP S/4HANAへのマイグレーション/再構築需要も高いのですが、アプリケーションはそのままインフラのみをクラウドへ移行するお客様も急増しています。この1~2年はこのような引き合いが強いのではないかと考えています。

このような状況を踏まえ、CTCはパートナー様向けに、新たに2つの施策を実施します。

クラウドの外部接続と BASISサービス体制をさらに強化

第1はCTCデータセンターと外部クラウドとの接続強化です。最近では、高信頼性や安定性、堅牢性が求められる基幹システムのコアを維持しながら、新しいシステムをIaaSやPaaS、SaaSで実現したいというニーズが高まっています。その結果、コアシステムと外部クラウドとの間の連携は、よりクリティカルなものになっています。しかし外部サービスの活用が進んでいくと、クラウド毎に接続方式が異なるため、ネットワークやセキュリティの運用が煩雑になります。また基幹システムとの連携が進むことで可用性やパフォーマンスも課題となり、新規ビジネスの開発ではスピードも重要になります。

このようなニーズに対応するため、CTCではCTCのデータセンターをハブに、高品質のマルチクラウド接続を提供するCTC Cloud Connectをご用意しています。すでにGoogleやAWS、Azureといった主要クラウドへの接続は提供済みですが、ここにSAP Cloud Platform(SAP CP)を追加します。これにより、CUVICmc2上でSAP S/4HANAを標準状態で使いながら、SAP CP上で動く各種新機能と連携さ

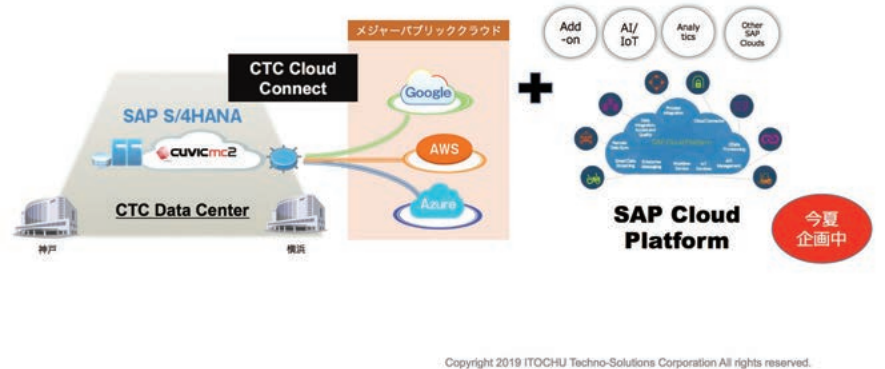
せることが容易になります。PoCも素早く実施でき、不要であればすぐにやめることも可能です。

第2の施策は、SAP BASISの移行/運用サービスの拡充と強化です。SAP BASISのエンジニアは不足しており、これが移行を阻む障壁になっています。この問題を解消するため、CTCではオフショアも視野に入れながら、この領域のサービスをワンストップで提供できる体制を強化していきます。このようなことが可能なのも、CTCの大きな価値だと考えています。

なお今年も10月25日にCTC最大のお客様・市場向けイベント「CTC Forum 2019」を開催する予定です。今回のテーマは“5Gが変える明日のエンタープライズIT”。こちらにもぜひご来場いただければと思います。



1. CTC CloudConnectにSAP CPを追加



【図2】

2. SAP BASISサービス

SAP BASIS (SAP NetWeaver) の移行/運用サービスの拡充



【図3】



「CUVICmc2(キュービックエムシーツー)」は、基幹系システムの運用に特化したクラウドサービスです。パフォーマンス SLA を含む「性能保証」、世界最高水準の評価を受けたセキュリティ設計を踏襲することで実現した「高いセキュリティ&コンプライアンス」、コンピューティングリソースの「実使用量に応じた従量課金体系」の3要素をすべて兼ね備えることで、SAP S/4HANAをはじめとするミッションクリティカルなシステムの安定稼働と低コスト運用を支援します。

CUVICmc2に関する詳細やお問い合わせは CUVICmc2 公式サイトまでアクセスください。

CUVICmc2公式サイト <https://www.business-on-it.com/ps/2001-cuvicmc2/>



伊藤忠テクノソリューションズ株式会社

〒100-6080 東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビル mrc-info@ctc-g.co.jp

<http://www.ctc-g.co.jp/>